第287号　2026（令和8）年11月1日　発行
編集・発行　カトリック新潟教区広報委員会
〒951-8106　新潟市中央区東大畑通1-656
TEL 025-222-7457　FAX 025-222-7467
https://www.catholic-niigata.net/

カトリック新潟教区報

神の望みを行う共同体として

新潟教区司教　パウロ　成井大介



皆様の祈りに支えられ、今年の3月10日、司祭叙階25周年を迎えました。皆様のお祈りに心より感謝いたします。25年を迎えたと言うことは、何かを成し遂げたというようなことではなく、神と、皆様と、福音を生きる歩みをともにすることができたということだと理解しています。これからも日々新たな気持ちでこの歩みを続けていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

神の望みを行う共同体として

わたしは9月の終わりに、このような言葉で始まるお手紙を教区の信者の皆様に宛てて出しました。様々な変化に直面している新潟教区の教会共同体が、宣教、典礼、愛の奉仕という三つの教会の本質の務めを、その時々にふさわしく行っていくため、どのように変化に対応していけばいいのか、ともに考えていきましょう、という呼びかけのお手紙です。皆様、手に取って読んでいただけましたでしょうか。

正直に書きます。お手紙にも書いたとおり、わたしは教会訪問や会議で何名もの方々から「個々の教会で高齢化が進み、人が少なくなり、活動がミサだけになり、財政が細り、建物が老朽化し、危機的状況にある。将来についてのビジョンを示してほしい」という意見を伺ってきました。この手紙の内容の検討を始めた頃、わたしの頭には「どのように変化に対応すればいいのか」をまとめようという考えがありました。しかし、祈り、現状についての理解を深め、多くの人々と意見交換する中で、「これは教会が直面する変化への対応策を作ればいいというようなことではない。信徒、修道者、司祭、司教、関係者すべてが、神の望みを敏感に受け止め、宣教、典礼、愛の奉仕をその時々にふさわしく行っていく共同体として成長していきましょうという呼びかけなのだ」と考えを根本的に変えました。皆さん、上に挙げた、高齢化、人数の減少、活動の縮小、財政の先細り、建物の老朽化という変化は、それらがすべて改善されたとしても、宣教、典礼、愛の奉仕が行われないのであれば、神の目にはあまり意味がないのです。逆に、たとえ小さく、弱く見える共同体であったとしても、工夫を凝らして宣教、典礼、愛の奉仕を行う共同体は、神の望みを実行する共同体なのです。

イエスは72人を宣教に派遣しました。財布も袋も履き物も持っていくなと教えました。72人が神の国を告げ知らせ、喜んで帰ってくると、イエスは言いました。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。父よ、これは御心に適うことでした。」（ルカ10章）

わたしは、新潟教区の共同体が、たとえ小さく、貧しく、ものを持たなくても、いや、持たないからこそ、神の国を告げ知らせるために宣教、典礼、愛の奉仕に取り組む共同体でありたいと願っています。わたしたちの小さな働きを、喜んで、誇りを持ってイエスに伝え、喜んでいただきたいのです。9月に出した手紙は、そのような共同体として歩んでいきましょうという呼びかけです。

キリストにおける交わり

さて、9月のお手紙は、宣教司牧方針の交わり、宣教、参加への取り組みに基づいて書かれています。今年、新潟教区は「キリストにおける交わり」を年間目標に掲げていますが、交わりは手紙でお示しした基本方針と取り組みの中で、非常に大切な意味を持っています。自分の望みではなく、神の望みを中心にするとは、キリストとの交わりのうちに歩むということです。そして、信徒、修道者、司祭、司教の交わり、近隣教会との交わり、地区レベルの交わり、まだ見ぬ次世代との交わりを、現状をしっかりと把握した上で、互いの声に耳を傾けながら、柔軟に、大胆に進めていきたいと思います。特に、小教区単位で完結するのではなく、様々なことを複数の教会で協力して実施することを大切にしてください。

神の望みをともに識別する

各共同体で、また他の共同体とともに、現状を把握して取り組みを考えるために大切なのが識別です。識別とは、祈りのうちに神の望みが何であるのかについて理解を深め、様々な取り組みの判断に生かしていくことです。教会共同体のあり方や、活動について計画を立てるとき、専門的知識やこれまでの経験に基づいて、または司祭や評議会メンバーの意見だけで判断するのではなく、共同体のメンバー皆が「聖霊はわたしたちをどのように導いておられるのだろう」という意識を共有し、一人ひとりの上に聖霊が働いておられることに信頼しつつ、互いの声に耳を傾けることが大切です。こうして、共同体は「わたしたちの望み」ではなく、「神の望み」を識別し、実行することができるのです。

イエスに派遣された72人のように、神の導きに信頼して歩みをともにして参りましょう。

ひとりで悩まず
わたしたちにご相談ください
カトリック新潟教区
セクシャル・ハラスメント相談窓口
司祭・修道者による未成年者性虐待と
セクシャル・ハラスメントについての
窓口です
TEL 080－8912－8758
受付 毎週火曜日　13：00～14：00
（除く祝祭日）

共に歩み、仕える喜びに満たされて―
アンリ神父叙階60周年・成井司教叙階25周年記念ミサ
10月12日



司祭団とお二人の共同司式


祝賀会の最後はお二人から祝福をいただきました。


教皇様からのメッセージを受け取られたお二人

寺尾教会
マリア・テレーズ　末吉のり子

秋晴れの快晴に恵まれた10月12日、新潟教会において、アンリ・ホイスゴムス神父様の司祭叙階60周年と成井大介司教様の司祭叙階25周年を祝う記念ミサが捧げられました。聖堂はお祝いに駆けつけた教区内外の信徒や司祭団で満ちあふれ、温かな祝賀の雰囲気に包まれました。

記念説教でアンリ神父様は、弟子たちの足を洗われたイエスの模範に触れ、司祭の使命とは困っている人々に仕え、その兄弟となることだと語られました。障害を持つ方々との共同生活など、自らの生き様そのもので福音を証しされてきた神父様の言葉は、集まった人々の心に深く響きました。

ミサには遠方から神言会修道会日本管区長エドガルド神父様、成井司教のご家族も臨席されました。途中、参加された方が体調を崩される場面もありましたが、居合わせた信徒の医師が速やかに駆け寄るなど、互いに支え合う教会共同体の温かな絆が示されました。成井司教は挨拶の中で家族への感謝とともに、自らの土台にあるのは「宣教師」としての歩みであり、大切なのは何年務めたかではなく「人々と共に歩み、神の愛を伝えてきたことそのもの」であると力強く語られました。

ミサ後は信徒会館で祝賀会が催され、お二人は多くの方々からの祝福と感謝に包まれました。最後はお二人共同の祝福が授けられ、60年と25年の尊い歩みを胸に、教区が一致して未来へ歩み出す希望の一日となりました。

司祭になったきっかけ

新潟教区司教　パウロ　成井 大介

わたしが召命を意識したきっかけは、小学6年生の時だったと思いますが、名古屋の神言神学院で毎年夏に行われていた侍者会に参加したとき、パプア・ニューギニアで宣教する司祭のことを聞いたことです。その司祭は、自らセスナ機を操縦して貧しい村に物資を届けていたのですが、その生き方が非常にかっこよく感じられ、自分もそんなふうに生きたいと思ったのでした。ただ、これは小学生が「サッカー選手になりたい」というのと全く同じだったと思います。

もう一つは、10歳のときに、それまで5年間家族と過ごしたインドネシアから帰国したときに感じた逆カルチャーショックです。一般に、海外に行くときよりも、帰ってきた時のカルチャーショックのほうが大きいと言われますが、わたしもまさにそうでした。帰国して公立の小学校に入りましたが、インドネシアにはなかった様々な規則があり、かなり違和感を覚えました。当時、家から一番近かった教会が名古屋の南山教会で、その向かいには神言会の小神学校がありました。そこには様々な国の宣教師や神学生がいて、それぞれがありのままに生きている雰囲気があり、その共同体に惹かれたというのが13歳で小神学校に入ったもう一つの大きなきっかけです。

わたしは、親や周りの人から、神学校に入ったら？と言われたことは一度もありません。司祭になるようにという神の声を聞いたことも一度もありません。しかし、振り返ってみると、宣教師として生きるようにいつも導かれてきたと感じるのです。この道のりをともに歩んでくださった神様と皆様に感謝いたします。喜びのうちに、これからも福音をともに生きていきたいと願っています。皆様、どうぞよろしくお願いします。

レッブ神父にならって

青山教会
寺尾教会　アンリ・ホイスゴムス神父

ベルギーの首都ブリュッセルには、「聖マリア学院」という宗教法人の学校がある。中等部と高等部の先生たちはほとんど司祭であった。私はそこで高等部を卒業するまで勉強を続けた。私は十歳の時に将来、司祭になることをひそかに考えていた。中学一年の頃に、私はこの国ではキリストの教えに接する機会がいくらでもあるから、まだキリストを知らない人がたくさんいる外国へ宣教に行こうと決心した。

高等部二年の時に、その学院で先生をしていた司祭が私にレッブ神父（1877～1940）の生涯について語った。その宣教師は中国に派遣されていた。当時、中国の司教たちは皆、外国人だった。そこで、レッブ神父は中国人の司教を任命し、彼らに教会を任せることが必要不可欠だと考えていた。バチカンは彼の考え方を受け入れ、1926年にレッブ神父が推薦した六人の中国人司祭をローマで司教に叙階した。その後、数十人のヨーロッパの若い司祭たちがレッブ神父を手本として地元の司教の下、中国、そしてその国が共産化した後はアジアやアフリカの様々な国で宣教活動に励んでいたという。私はこの宣教会の司祭になることを決めた。

司祭になった時、私は日本に来ることを特に考えてはいなかったが、新潟の司教がレッブ神父のグループの司祭を望んでいたため、私はここに派遣された。

私にも、教区の信徒にも大切なのは、イエスの示された道を忠実に歩めるように、福音書に記されている彼の教えを深めることだと思っている。イエスを模範とする人生を歩もうと努めるなら、私たちもまた、イエスの人格の新たな側面を徐々に発見し、イエスの素顔を周囲の人々に知らせることができるようになるだろう。

「日本カトリック幼保連盟 第63回教職員研修大会 新潟大会」を終えて

亀田教会
マリア・マグダレナ　小千田 裕子

令和8年7月28日（火）、29日（水）の二日間にわたり、朱鷺メッセを会場に、全国のカトリック園で働く教職員450名余りをお迎えし、研修会が開催されました。

3年半程前、新潟での開催が決定したものの、全国的にコロナ感染症が蔓延し1年延期。1年後、対面とオンラインでのハイブリッド型での開催の希望が叶わず、急遽開催地が変更に。そんな思いを経て、63回目にして初めて新潟教区での開催となりました。

初日は午後からの開始で、成井大介司教様より「幸せな人生のために」と題して基調講演をしていただきました。インドネシアで幼少期に過ごされたお話をもとに、生きていくうえで目指す幸せとは何か、をお話くださいました。その後、新潟清心女子中学・高等学校のみなさんによる、ハンドベルの素敵な音色を聞き、本当に心洗われ、癒される思いがしました。

二日目は午前中、県内外から5名の講師を、午後からは小児科医である多賀千之先生をお招きし、学びを深めました。最後は成井大介司教様の司式により、ずらっと並んだたくさんの神父様と共に、ミサに参加させていただきました。聖母学園の先生方には、ミサ曲のアルト部分を歌っていただき、厳かな、神聖な雰囲気の中、本当に素晴らしいミサになりました。

理事長佐藤允広神父様のリーダーシップの下、3年半の準備期間を経て、姉妹園の先生方の協力を得て開催されたこの研修会は、私にとって、常に神様に見守られ、たくさんの喜びと感謝で満たされた恵みあふれる大会となりました。関係者のみなさまに心より感謝申し上げます。



地区便り

秋田地区

ともに歩み、新しい教会の旅へ
―秋田地区・国際ミサと交流会を通して―



能代教会主任司祭　マルティヌス・オマン

九月二十七日、秋田地区国際ミサと交流会が開催されました。参加者の国籍は十二ヶ国以上に及び、参加者数は約二百名にのぼりました。異なる言葉や文化を持つ人々が同じ場所に集い、信仰を分かち合う姿に、教会共同体の豊かさと可能性を感じることができました。

今回の出会いと交わりを日々の教会生活へとつなげてゆくことが大切です。互いに協力し、世代や国籍、文化を越えて支え合うならば、教会は地域社会の中で、希望と愛を証しする場となるでしょう。

さあ、ともに歩みましょう。互いの違いを恵みとして受け止め、シノドス的な教会共同体への、新しい旅を始めましょう。

秋田地区　国際ミサに参加して

土崎教会　アンナ　石崎トゥエン

今年もベトナムの共同体として、聖歌と奉納などを担当させていただきました。奉納の時に二人が足りなくて、外国人の男性（広報委員注：ザンビアの男性）に手伝っていただきました。一緒に奉納したことを含めて、国や文化や言葉が違っていても、心を一つにして、お祈りとミサに参加できてとても感動しました。

うちの2歳の娘も騒がしくして、大変申し訳ない気持ちもありましたが、娘にとってはパスポートを用意して外国に行かなくても、さまざまな国の人々とお会いして交流でき、本当に素晴らしいひとときでした。

国際ミサを通して、愛の境界がないことを感じました。これからも多くの人々との交流を大切にしていきたいと思います。

山形地区

米沢殉教四百周年を迎える心の準備

山形教会　ヨハネ　小林雅人

10月11日、秋晴れに恵まれ、成井司教司式のもと、米沢北山原殉教祭ミサが捧げられました。

説教では、3年後に米沢殉教４００周年を迎えるにあたり、イエスが人を招くときに大切にしている3つの姿勢が司教様から示されました。1つ目、全ての人を招く。身分や立場、考え方が違う壁を取り除き、すべての人を招き入れる。2つ目、待っているのではなく、自分から外へ出向き、人と出会い、自分から招くこと。3つ目は、とくに困難にある貧しい人、病む人、苦しんでいる人に寄り添い愛と慈しみをもって招くということでした。そして、この3つの姿勢を大切に生き抜いたのが、米沢の地で殉教されたルイス甘糟右衛門と52名の殉教者であり、今を生きる私たちにも求められている姿勢でもあるというお話をいただきました。



米沢殉教４００周年シンボルマーク
新潟教会のステンドグラスをもとに製作。赤は殉教者の血を表す。雪の結晶は雪の中での殉教を、結晶の大きさの違いは大人も子どももいたことを表す。

7月12日には、開催地の米沢教会を中心に４００周年記念事業の実行委員が選出され、「米沢殉教４００年～愛といつくしみにいきた人たち」をテーマに宣教・典礼・奉仕の役割を分担しながら、講演会・シンポジウムなど、どのような形で米沢の殉教を伝えていくのか検討されました。

下越地区

新潟教会　誕生150周年記念ミサ

新潟教会　マリア　田中明美

9月13日、新潟カテドラルにおいて、成井司教司式のもと、新潟教会誕生１５０周年記念ミサがささげられた。説教では、聖堂という建物を守ること以上に、宣教・典礼・愛の奉仕を通して福音を証しする教会であり続けることの大切さが語られた。また、今日の新潟教会を築いた先人たちの労苦と恵みに感謝し、神が望まれる教会共同体を目指して歩むよう招かれた。当日の典礼は「与えられたいのちの水」をテーマに構成され、洗礼の恵みをあらためて心に刻む機会となった。

新潟教会では、教会誕生１５０周年と聖堂献堂１００周年を記念し、本年9月8日から来年11月21日までを「信仰の恵みと喜びの祝年」としている。祝年を記念してカードも作成された。この祝年を通して、一人でも多くの方が新潟教会へ巡礼に訪れ、先人たちの信仰の歩みに思いを馳せながら、ともに祈りと感謝の時を分かち合うことを心より願っている。



〈記念カード〉

花園教会からご案内

花園教会では75周年記念ミサと記念講演会を11月23日（月）（勤労感謝の日）に予定しております！

どうぞ花園教会までお越しくださり、「共に！」、お祈りいたしましょう。

〈記念ミサ〉十時～　司式 成井司教

〈講演会〉　十一時～　晴佐久昌英神父

下越地区

新発田地区宣教150周年・新発田教会献堂60周年記念ミサ

新発田教会　主任司祭　高橋　学

２０２６年10月17日（土）にカトリック新発田教会聖堂で、新発田地区宣教１５０周年・新発田教会献堂60周年記念ミサを、パウロ成井大介新潟司教主司式、歴代主任司祭ら6名の共同司式、35名ほどの会衆の参加を得て、挙行することができました。

ミサ後、成井司教による記念講演が行われました（写真）。遥かな伝道の歴史に思いを馳せ、新発田地域における伝道開始時期（１８７６年、明治9年）のパリ外国宣教会による宣教が、魂の救いを目的とし、会員一人ひとりの愛徳をもって、日本文化と対話するように親しみやすく行われた点について、言及がありました。

中越地区

中越地区大会　三条教会で開催

三条教会　アロイジオ　丸山俊雄

令和八年十月十八日　カトリック三条教会にて、五十五名ほどが参加し、中越地区信徒大会が行われました。

中越地区（長岡・見附・栃尾・三条・加茂教会）

成井司教様から講演していただきテーマ「キリストにおける交わり」宣教のためにともに歩む共同体として

私たちは、文化や言語、世代などの違いを持ちながらも、同じキリストの福音を信じる教会共同体です。私たちが交わりを深めようとするのは、教会の中で、仲の良いグループを作るためではありません。社会に向かって、ともに宣教するため、神の愛を証ししていくためです。

一つの小教区として、また小教区の境を越えた近隣教会や地区との交わりの中で、私たちは共同体として、どのように宣教に取り組むことができるのでしょうか。



その後、信徒館において祝賀会を開催しました。救いを新発田地域住民に伝えるための努力が、折々、聖職者、修道者、信徒らによって、困難の中それぞれ続けられてきた歴史を、想起する機会となりました。小教区の信者にとって、今後の信仰生活の励みになると考えております。

参加された各位に、そして、み名が大切にされることを祈念しておられる各位に、感謝を申し上げます。



講演の後、五グループに分かれて司教様より問いかけられた事、小教区の現状、高齢化、祈り、次世代への提言、個人の信仰に耳を傾ける。また、外国籍の方々との交流の深め方など分かち合いを行いました。

昼食には各自おにぎり持参で集まりましたが、三条教会より豚汁を振る舞い好評でした。

午後からは、中越地区協議会総会があり、行事報告および会計報告を行いました。

最後に成井司教様司式のミサがあり、たくさんの方々とお祈りをして、次回の開催（長岡教会）には、より大勢の参加を呼びかけ終了いたしました。

大会開催・運営にあたり、成井司教様、中越地区協議会委員、三条・加茂教会信徒の皆様本当にありがとうございました。

上越地区

地区の活動と目指すもの

高田教会主任司祭　伊能哲大

上越地区では、長岡地区の時代から、信徒使徒職協議会を通して、各小教区の交わりがたびたび行われ、また集会祭儀の司会者の養成なども行われていました。そのため、新しく上越地区に移行しても、基本的にそれまでの活動を引き継いだ形で行っていますが、習慣化に陥ることがないように気を付けておりますし、また将来を見越して、これからの世代に対してスムーズに引き渡していけるような活動を心がけております。

地区の活動として、地区大会を毎年五月末に行い、地区の協議会は基本的に毎年三回行うことにしています。協議会の役割としては年間のスケジュール、地区としての献金の宛先、行事などの計画を立てています。

本年度の活動としては、福島で活動する柳沼千恵子さんを招いて、地区大会を行い、また三月には朗読奉仕者の役割を中心として養成講座を開きました。さらに十月の信徒の集いでは妙高教会の信徒の方に講演をしていただいています。

地区の小教区どうしの交流として、二年周期で地区の六教会すべてを回ることにしています。そのことにより、各小教区がどのような地域にあり、そこでどのような信徒が活動しているかを、お互いに知り合うきっかけとなっています。ただ、状況の変化により、見直しも必要となっています。

また、小教区や地区の壁を越えた青年たちの活動も活発で、子どもたちを中心としたファミリー・キャンプなども行っています。

これからの地区の役割は、今年九月二九日付の成井司教様の司牧書簡『神の望まれる教会共同体をめざして』に現れていますように、非常に重要になってきています。地区としてシノドス的な教会をめざして、信徒・修道者・司祭が「ともに歩む」ことを実現していきます。言い換えれば、宣教・典礼・愛の奉仕に根ざした小教区、地区を作り上げるために、特に「霊における会話」の手法を用いながら、多様な背景を持つ信徒（この中には当然移住者も含まれます）の意見を汲み取り、上越地区における宣教・典礼・愛の奉仕を、時代や状況の変化に合わせて、構築していく働きをしていきます。そのため、信徒の生涯養成に力を入れていくことを考えています。

「東日本大震災・原発事故から15年～大切ないのちを守り、未来に繋げるために…」

文責：新潟教区カリタス委員会・新潟教会　スザンナ　野村みか

2026年8月9日（日）、平和旬間講演会が、新潟カトリックセンターを会場に、ZOOMによるオンライン配信を併用したハイブリッド形式で開催された。講師は一般社団法人「カリタス南相馬」所長の根本摩利氏。高校の音楽教諭から看護師を経て南相馬へ移住し、現在は地域コミュニティの再建に尽力している。原子力発電の積極活用が議論される今、講演では震災当時の状況を振り返り、未来へ繋ぐ視点から南相馬の現状が分かち合われた。

原発事故後、半径30㎞圏内は警戒区域として食料や医薬品の搬入が途絶し、緊迫した状況下で新潟県や群馬県などへのバスによる集団避難が実施された。しかし、行き先が誰にも知らされず、人によっては家族が離れ離れになるなど、過酷な避難となった。

その後、コロナ禍で県外からのボランティアが制限される中、生活困窮家庭や外国人技能実習生への物資支援を教会と連携して実施。そこから、外国籍住民と教会を結ぶ新たな絆が生まれた。近年は震災を知らない世代の学生ボランティアが増え、現地を五感で学んでもらう案内活動に注力している。

また、南相馬市小高区では、震災後に線量計の寄贈を受けた縁でチョルノービル（チェルノブイリ）との国境を越えた温かい交流を続けてきた。近年は現地の小学校とクリスマスカードを交換していたが、その学校も2024年からの戦争で破壊されたという。かつて故郷を奪われた経験を持つ南相馬の人々は、すぐさま支援に動いた。被災の痛みを分かち合う者同士が、国を超えて深く結ばれ、互いの心を支え合ってきた。

震災から15年が経過し、社会的環境は様変わりしたが、ウクライナでの戦禍は、南相馬の人々にとってより大きな心の痛みとなったことだろう。個人的には、国外避難に向かうウクライナ市民の姿が、かつて集団避難のバスに乗り込んだ福島・浜通りの住民の姿と重なって見えたことが思い出された。

教区報第287号をお読みいただき、ありがとうございました。今号から各地区の広報委員が意見を出し合い、協力して紙面づくりを進めています。新体制で最初の号をお届けできたのは、記事をお寄せくださった皆様のおかげです。これまで教区報の編集・発行にご尽力くださった方々に心より感謝申し上げます。これからも教区の皆様をつなぐ紙面を目指します。

新潟教区広報委員会
事務局：大瀧浩一神父
広報委員：末吉のり子（委員長）
関はな江（秋田）
小林雅人（山形）
田中明美（下越）
出口勝也（中越）
伊能哲大（上越）

ワールドユースデー

参加資格　原則18歳～35歳

ワールドユースデー（WYD）は、1984年に教皇ヨハネ・パウロ2世の提唱で始まった、カトリック教会における若者のための国際的な信仰の集いです。2～3年ごとに世界各地で行われるこの大会には、世界中から数十万～数百万人の青年が集い、多様な文化を超えて交わりを深め、教皇ミサで共に祈ります。17回目となる2027年大会は韓国で開催され、テーマは「勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」（ヨハネ16・33）です。隣国韓国での開催。日本からも多くの若者の参加が期待されています。

公式日程

Aパターン　教区での日々＆本大会の参加
〈2027年7月29日(木)～8月9日(月)の12日間〉

教区での日々：韓国内の教区に滞在し、現地の信仰や文化を体験します。
本大会：ソウルに全員が集結し、カテケシス（信仰教育）や教皇ミサに臨みます。
※韓国の教区と関係の深い各教区が巡礼団を編成するため、実施日程は若干の違いが出る可能性があります。新潟教区からの参加希望者は、他教区のプログラムに参加させてもらう形となります。

Bパターン　本大会のみの参加
〈8月2日(月)現地集合～8月9日(月)現地解散の8日間〉

※申込詳細は、26年の秋に発表。
※カトリック中央協議会青少年司牧部門が実施する巡礼団です。
※参加費概算は約60,000円（未確定）、そのほか各自が手配する韓国までの往復渡航費がかかります。

Cパターン　週末のみの参加
〈8月6日(金)現地集合～8月9日(月)現地解散の4日間〉

※申込詳細は、26年の秋に発表。
※カトリック中央協議会青少年司牧部門が実施する巡礼団です。
※参加費概算は約35,000円（未確定）、そのほか各自が手配する韓国までの往復渡航費がかかります。

☆そのほか詳細は、カトリック中央協議会のホームページから「SEOUL2027　ワールドユースデーソウル大会」の項目をチェックしてください。随時、最新の情報が公開されます。また新潟教区における担当者は、糸魚川（いといがわ）教会の伊藤幸史（いとうこうし）神父です。参加希望の方で質問がある場合は、糸魚川教会（TEL 025-552-3406：留守番電話あり）へ気軽にお問い合わせください。